2026-2-13

地域のコミュニティと子どもの関わりについて

3年2組24番　中棹瞳子
3年2組28番　平川柚香
3年3組17番　田中沙羅
3年3組20番　鶴川琴寧
3年3組33番　宮崎千有希

Keyword: 「ボランティア団体」「小学校」「地域コミュニティ」「児童虐待」「登美っ子」「とみりんくプロジェクト」

1. はじめに

活動を始めた当初は「児童虐待を減らすには」という問いについて探究を進めていた。しかしその中で、高校生に出来る限界と、「児童虐待」という課題のセンシティブさを感じ、探究活動を思うように進めることができなくなった。そこで、テーマを思い切って変更することを決めた。短い期間ではあったが児童虐待の調査を通して、地域の活性化により子どもに関わる人間を増やすことで、児童虐待が発見しやすくなること、それが間接的に児童虐待を防ぐことに繋がるということがわかった。そのことから地域を活性化し、家族以外の人同士で助け合える地域を作ることを探究の目標にした。

2. 序論

本探究の目的は、国際高校の生徒の中で子どもたちへの関心を持つ人を増やし、地域の結びつきを強め、子どもの居場所を作ることである。そして、最終的には国際高校の生徒でボランティア団体をつくることをめざす。本探究は、「地域のボランティア活動を通して、子どもへの関心の輪は広がるのか」という問いを基に活動を行った。

問いを定める以前、地域との繋がりを持つという目的で、秋頃に中登美ヶ丘近隣公園で開催された登美ヶ丘わいわいフェスタに国際高校のボランティアとして参加した。テントの組み立て、片付けやお店の手伝いを行い、わいわいフェスタに携わる地域の方々との交流を深めた。後日、地域で行われるイベントとの関わりやわいわいフェスタを主催されていた方にお話を伺った。その方の紹介により、私たちは「奈良市子どもセンター」について学ぶ機会を得た。

奈良市子どもセンターは、妊娠期から18歳までの子どもとその家庭を支援する総合的な施設であり、地域の中で子育て家庭を見守り、支える役割を担っている。子どもとその保護者が安心して過ごせる環境づくりを目指し、相談・交流・発達支援などの幅広い取り組みも行っている。ここでは、保育士や言語聴覚士と言った、専門的な知識を備えた大人が子どもや保護者のケアを行い、サポートしている。しかし、職員の方によると、全ての虐待児を発見することは不可能であるため、子どもセンターが児童虐待問題にできているアプローチは全体のほんの一部であると言う。そのため、重要であるのは児童の周囲の人々が児童虐待を発見することや、子どもたちの第3の居場所になることであると学んだ。この経験から、児童虐待という課題のみに向かうのでは無く、「地域との繋がり」というキーワードと児童虐待の関わりについての探究活動を始めた。

『児童虐待予防に包括的ケアが必要であると世界的にも示される中、地域包括ケアシステム構築の日本の経験を、児童虐待予防の視点にも取り込み、その仕組みづくりを進める必要があるだろう。その仕組みとしては、子育て世代包括支援センターを設置し母子に関する相談を受け助言や指導を行うなどの包括的な支援を行うことが挙げられている。』

私たちにそのような地域包括ケアシステムを作ることは難しいが、そのようなケアができる場所を作ることはできるのではないかと考えた。子どもたちが安心安全に過ごせる、そして何より楽しく遊ぶことのできる場所を作ることで、地域の繋がりを広げられると考えた。探究方法としては、

国際高校の近くにある登美ケ丘小学校の放課後ボランティア（登美っ子ひろば）に参加する人を国際高校内で募り、参加前、参加後でアンケートを取り地域への関心の変化を確認した。同時に参加人数の変化も確認した。

3. 本論

本探究の主軸となる活動として、放課後子ども教室「登美っ子ひろば」のボランティアに参加が挙げられる。「登美っ子ひろば」は約1ヶ月に2回、登美ヶ丘小学校が放課後子どもたちに向けて校庭や一部教室を開放する、学童保育のようなイベントである。「子どもたちが安全な場所で安心して遊べる環境を確保する」「異年齢集団で遊ぶことを通して社会性を身につける」「子どもたちを見守る地域住民との交流を通して、地元への愛着心を育てる」が目的とされており、ボランティアにより運営されている。わいわいフェスタを運営されている方の紹介で、初回は田中、中棹の2名が参加し、登美ヶ丘小学校の生徒が放課後安全に遊べるよう、主に遊びのサポートや、コミュニケーションに取り組んだ。

その後メンバー全員で参加した登美っ子ひろばのボランティアを通して、「地域のボランティア活動を通して、子どもへの関心の輪は広がるのか？」というリサーチクエスチョンが決定された。そして、ボランティア活動の規模を国際生に広げ、国際生による登美っ子ひろばボランティアを、卒業後も持続可能なボランティアとすることを目標とした、「とみリンクプロジェクト」を立ち上げた。

「とみリンクプロジェクト」を進めるため、国際生への広報活動を行った。登美っ子ボランティアの広報活動ではポスター制作や参加前、後のアンケート作成、Instagramの開設を行った。参加前アンケートは登美ヶ丘地区への興味関心や、登美ヶ丘地区で行われているイベントの記入欄から国際生と登美ヶ丘地区の現状を調査できるよう作成した。Instagramでは「とみリンクプロジェクト」の活動紹介や、登美っ子ひろばボランティア募集の投稿をすることで、参加者の増加を図った。

また、放課後子ども教室の方々から登美っ子ひろば特別教室のうちの一回の枠を譲っていただき、子供達に向けてのイベントを企画、開催させていただけることとなった。「とみリンクプロジェクト」の一環として登美ヶ丘小学校と国際高校の生徒たちの繋がりを強めるため、国際高校の特色を生かした、外国語の遊び紹介のイベントをすることとなった。

募集した国際生と共に登美っ子ひろばのボランティアを行った際、我々5人に加えボランティアとして高校3年生3人、計8人が参加した。そのうち1人はサッカーにより子どもたちから男女差別の撤廃をめざす探究をしており、活動の一環として「とみリンクプロジェクト」に参加した。活動自体は大きく変わらず、各々散らばって子供達の遊びをサポートし、仲を深めるとともに子供たちのケガなどを防止した。

国際生を募集してから2回目の登美っ子ひろばのボランティアでは、第1回のメンバーに加え、新たに高校1年生6人が参加し、計14人となった。ボランティア内容は変わらず、子供たちのサポートをした。アンケート調査では、「国際高校がある登美ケ丘地区に対する興味関心はありますか？」という設問に対する回答に大きな変化は見られなかったが、「次回の登美っ子ボランティアにも参加したいですか？」という設問では11人が回答した中で、6人が参加したい、5人がもし予定が合えば参加したいと回答した。このことから、参加者の地域に対する関心などはボランティアを通して変化しなかったが、登美ヶ丘小学校のボランティアを通して子どもと関わることへの積極性は増加したと考えられる。このことから、子どもたちへの関心を持つ国際生を増やし、地域の中でも小さい範囲となってしまったが、登美ヶ丘小学校との結びつきは強めることができたと言える。

夏休み期間に行った私たち主催の「世界の遊び旅」では、高校1年生のボランティア1人と共に、国際高校で学ぶ言語を使って登美ヶ丘小学校の子どもたちと世界の遊びをした。まだ活動の引き継ぎ計画などは無いが、このようなイベントを国際生が登美ヶ丘小学校で定期開催できれば、国際高校と登美ヶ丘小学校の結びつきが強まり、当初の目的であった登美ヶ丘小学校の子どもたちが頼ることのできる相手を増やすことが達成できると考える。

4.結論

3回の登美っ子ボランティア活動を通して、活動に参加した人数が増加したこと、また、そのうち約半数が高校1年生であったことから、下の世代に「とみリンクプロジェクト」を完全に引き継げたとは言えないが、子どもたちへのボランティアに興味のある国際生を増やせたと言える。また、事前・事後アンケートより、子どもと関わることへの積極性は増加したと考えられる。このことから、子どもたちへの関心を持つ国際生を増やし、地域の中でも小さい範囲となってしまったが、登美ヶ丘小学校との結びつきは強めることができたと言える。この結果から、私たちは問いの答えを「地域のボランティア活動を通して、子どもへの関心の輪は広がる」とした。

今後の課題としては、私たちが卒業してもなお登美っ子ボランティアへの参加を継続させていくために、このとみりんくプロジェクトを継いでくれる人を探すことが挙げられる。

5.おわりに

私たちは探究の方向性が決まる前からイベントへの参加などの行動を起こし、人脈作りと経験作りに励んだため、そこから計画がスムーズに進むことが多かった。このことから、行動を起こすことの大切さを知った。校内の他学年との関わりも増え、校外でも放課後ボランティアの方や、こどもセンターの方、野外活動センターの方などと知り合うことができた。そのため私たち自身のコミュニティも増え、放課後に下校している小学生とすれ違ったとき手を振ったり挨拶をしたり出来るほどになった。さらにとみっこひろばでの特別会では「世界のあそび旅」というイベントを企画制作する大きな活動をした。これまでの活動で関わった方々に協力してもらいながら、準備や日程調整を行うという経験を高校生のうちにできたので、今後の大学生活や、その先にも活かすことができるだろう。保育や看護などの進路に進むメンバーが多いので、人と関わり暖かいコミュニティを作る経験は全てのことに役立つと考える。「とみりんくプロジェクト」達成を目指すため、今後の放課後ボランティアも広報と参加を積極的に行いたい。

6.参考文献・出典

大澤絵里・越智真奈美,「特集:子どもへの虐待のない社会の実現に向けて—児童虐待予防に向けた課題と戦略—＜解説＞市町村における地域の児童虐待予防と対応のしくみの課題と展望—公衆衛生学アプローチと包括ケアシステムとの融合—」,
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jniph/70/4/70_385/_pdf/-char/ja
,2021
https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h17/hakusho/h18/html/H1022100.html
都市部、地方部における地域コミュニティの衰退（国土交通省）